

もう片方の生きる

今朝も腹を空かせて

登校したり

くすんだ色の雑じりあう

台所や子ども部屋に 引きこもり

あてもなく 凍えた足どりで

ピカピカの町を さ迷い歩く

ひもじい子らの 腹をみたすため

昼も夜もなく

公も私もなく

働く女たち

とうとう 生活苦と病に倒れ

死を 待ちわびるばかりとなったとき

純白の寝具に 包まれ

安堵のすえに 深いため息を洩らすのだ

「どうか残されし父と夫と子らの

毎日が安らかでありますように」

狂った歯車がおしとどまることなく

今もなお駆動し続けているのです

母よ！

娘の娘の そのまた娘の時代にも